

プロローグ

「This Is My Father's World」の作詞者は、アメリカ長老派教会の牧師、マルトビー・D・バブコック (Maltbie Davenport Babcock, 1858-1901) です。彼は、最初の任地近隣のナイアガラ断崖を散歩しながら美しい自然を眺めるのが日課で、「今から『父なる神の世界 (my Father's world)』を見に行ってくるよ」が口癖でした。この時の喜びと信仰が詩文として残され、彼の急逝後妻により発見され遺稿集に収録・出版され、さらに彼の親友による訳詞と編曲を経て讃美歌集に収録され世界に広まりました。

ところで、讃美歌 90 番と一般的英語讃美歌 “This Is My Father's World” の歌詞は全 3 節です。その第 1・2 節の主題は「美しい自然の描写」ですが、第 3 節で「現実の悪や苦難の中での信仰告白」へとテーマが急展開しますが、この“飛躍”は決して不自然なものではありません。この讃美歌はただの自然讃歌を超え、困難な時代を生きる人々に希望と勇気を与える力強い讃美歌です。

1. 出生、学生時代

1858 年、彼はニューヨーク州シラキュースで生まれました。温厚な人柄と卓越した知性を持ち合わせていた彼は、優れた運動能力と音楽の才能にも恵まれ、1879 年にシラキュース大学を最優等の成績で卒業後、長老派教会牧師を目指しました。

2. ミニストリー

第 1 期 (1882 ~ 1885/1887 年)

1882 年、オーバーン神学校で学位取得と按手後、ニューヨーク州ロックポート第一長老派教会 (First Presbyterian Church in Lockport) (*1) に最初の任地として赴任。同年 10 月 4 日、著名な弁護士の末娘、キャサリン・エリオット・トールマン (1857-1943) と結婚し、二人の間には 2 人の息子が生まれましたが、二人ともに生まれたその年 (1883 年、1890 年没) に夭逝しました。

ロックポートの街の中心部は、ナイアガラ崖線 (*2) の尾根部分とそれに隣接する高台に位置しています。そこからの美しいオンタリオ湖とニューヨーク州北部の景色を眺めながらの散歩やジョギングを彼は日課のように親しみ、「私はお父さんの世界を見に行ってくるよ (I'm going out to see my Father's world)」が口癖でした。

こうして、大自然の中に神の御手を見出し「天の父の創造物」として深く愛した彼は、創造神学と神の絶対的な主権を信じる改革派神学を土台として、「すべては神の愛と支配の中にある」ことを生涯宣傳伝えました。

彼の死後、この期間に書かれた詩が妻によって出版され、今日世界中で愛される讃美歌「ここも神のみくに (“This is My Father's World”）」のベースになりました。

第 2 期 (1887 ~ 1899/1900 年)

メリーランド州ボルチモアのブラウン記念長老派教会で主任牧師を務めました。当時のボルチモアは、第二次産業革命期の急速な工業化と都市化の波が押し寄せ、労働力として多くの移民が流入し、深刻な社会問題や人種間の緊張も抱えていました。作家マーク・トウェインは、表面は富で輝いていても内実は腐敗や格差に満ちた当時を「金メッキ時代」と言う造語で皮肉りました。そこでのバブコックは、

- ・創造神学と実践的神学を結びつけ、キリスト第一主義 (*3) に根ざし、
 - ・説教は抽象的・教理的にならず、信徒の日常や人生の喜怒哀楽に寄り添い、
 - ・逆境や困難に直面しても、ポジティブで力強いキリスト者として立つ望みを説き社会活動にも邁進しました。
- こうした彼の説教や牧会・社会活動と、卓越した人柄と人物的魅力は地域社会全体からの深い信頼を得ました。ニューヨークへの移籍話が持ち上がると、教会関係者ばかりか他教区のキリスト教徒、ユダヤ教徒、さらに

は宗教に無関心な市民や、彼が支援していたジョンズ・ホプキンス大学の学生・教授陣までもが、ボルティモアに留まるようバブcock牧師に熱烈に懇願しました。ボルチモアの人々の彼に対する愛着は、離任後も急逝後も消えることはなく、ブラウン記念長老派教会には、彼を記念してレイス・C・ティファニーが手がけた美しいステンドグラス「聖なる都 (The Holy City)」が寄贈され、今も彼への深い敬愛の証として残っています。

第3期(1900～1901年)

全米でも屈指の権威ある教会ニューヨーク市ブリック長老派教会主任牧師着任後まもなく、彼はそこでの激務により深刻な疲労に陥りました。健康を案じた教会は、彼に休暇と資金を贈り1901年2月に妻カサリン同伴で中東・聖地旅行に送り出しました。ところがその帰路、地中海熱と呼ばれる細菌感染症に感染し、体力が低下していた彼は回復せず、緊急入院先のナポリ国際病院で客死しました(5月18日、42歳)。

この病は波状的な高熱と全身症状を伴い、当時の記録では「脳炎 (Brain fever)」とも表現されるほどの激しい脳への影響をもたらしました。その結果、深刻な精神錯乱(せん妄)に陥った彼は正常な判断力を失い自傷行為に及んだようです。彼の最後の言葉は、「昇汞(しょうこう、当時医療器具の殺菌や手指の消毒に使用)を飲んでしまった」という旨のものだったと伝えられています。

遺体が米国に戻った後、彼が最後に牧師を務めていた同教会で葬儀が、ボルティモアのブラウン記念長老派教会では追悼式が執り行われ、彼の故郷ニューヨーク州シラキューズのオークウッド墓地 (Oakwood Cemetery) に子どもたちと共に埋葬されました。なお1943年には、妻カサリンもそこに葬られました。

当時の新聞(ニューヨーク・タイムズなど)は「バブcock牧師が自殺」とセンセーショナルに報じ、人々に大きな衝撃を与えました。しかし、妻や遺族、彼をよく知る教会のメンバーは、これが彼の本意ではなく「病気がもたらした錯乱による不慮の事故である」として彼の名誉を守り続けたことから、彼が生前綴った個人的詩句は、崇高で霊的な讃美歌“ This Is My Father's World ”へと昇華されました。

3. 讃美歌 “ This Is My Father's World ” の誕生

1901年 妻による詩文 “ This Is My Father's World ” (全16節) の出版

夫が急逝したその年妻カサリン (Katherine Eliot Tallman Babcock、1857-1943) は遺品整理中に16節からなる詩を発見しました。 ⇒資料2 原詩(全16節)

それは、夫の最初の任地ロックポートに住んでいた頃、近くの丘へ散歩に出かける際の口癖だった「 I am going out to see my Father's world (お父さんの世界を見てくるよ)」との言葉から生まれた美しい詩でした。

全16節の各節が「 This is my Father's world 」で始まり、各節は4行で構成されたこの詩は、“ This Is My Father's World ”とのタイトルで、他の主要著作物と共に妻カサリンと友人たちによる遺稿集『 Thoughts for Every-Day Living 』(*4)として1901年に出版されました。妻カサリンの、不慮の死を遂げた夫への愛と信頼、夫を召した神への信仰が無ければ、現代の私たちはこの美しい讃美歌を歌えませんでした。

1915年 親友による讃美歌(全3節)の出版

讃美歌への訳詞と編曲、そして出版の労を執ったのは、バブcockと同じ長老派教会で活動していたフランクリン・L・シェパード (Franklin L. Sheppard、1852 - 1930) です。そこには、亡き親友バブcockへの哀悼と敬意と、バブcockが残した詩を教会や子どもたちに歌い継いで欲しいとの思いが込められています。

(1) 全3節への訳詞

かれは、まず遺稿集に収録された16節の原詩(各節4行)から、「創造主の讃美」部分と「現実の困難に処する終末信仰」を歌う6つの節を2つずつ結合して全3節(各節8行)へと再構成しました。

⇒資料3 讃美歌90番「ここも神のみくになれば」、「 This is my Father's World 」の歌詞

この再構成の結果、作詩者バブコックの思考プロセスにあった「間(つなぎ)」の言葉が省かれ結果、バブコックが生涯説き続けたポジティブで力強いメッセージの核心部が際立つことになりました。

(2) 曲付け(編曲)と出版

シェパードは、バブコックのメッセージを載せるメロディには「神が創造した美しい大自然」の温もりを感じさせる旋律が最も相応しいと考え、子供の頃に母親から教わり親しんだ伝統的英国民謡を編曲し、それにラテン語で「祝福された地球、大いなる大地」を意味する「TERRA BEATA」という曲名を付けました。そして1915年、「This Is My Father's World」(全3節)は米国長老派教会の教会学校向け讃美歌集『Alleluia』で出版され、その後の『The Presbyterian Hymnal (1911年版の1917年改訂増補版)』により、産業革命の荒波の中、過酷で理不尽な時代を耐え抜く人々に希望と安らぎと勇気を与え、世界中で歌われるようになりました。(*5)

■ 参照情報

*1 ロックポート第一長老派教会 (First Presbyterian Church in Lockport)

1823年に設立され、バブコック牧師が説教に用いたとされる会堂は、現在も礼拝等で使われています。教会内部には、世界的に有名なガラス工芸家レイス・カムフォート・ティファニー (Tiffany Studios) が手がけた貴重なステンドグラスの数々が保存されていることで有名です。

*2 ナイアガラ断崖 (ザ・エスカープメント)

ニューヨーク州から五大湖周辺を経てカナダのブルース半島まで約 725km 続く壮大な石灰岩の断崖です。有名なナイアガラの滝はこの断崖を水が流れ落ちることで形成されています。

*3 彼の聖書の巻頭(見返し)には、彼の決意がこう書き記されていました。

"Committed myself again with Christian brothers to unreserved docility and devotion before my Master."
「我が主の御前にて、何一つ惜しむことなく従順であり、献身することを、キリストにある兄弟たちと共に再びここに誓う。」

*4 『Thoughts for Every-Day Living From the Spoken and Written Words of Maltbie Davenport Babcock』 Kindle 版が、amazon.co.jp では¥2,712、Amazon.com では JPY1,038 (2026/7/4 時点)で購入可能です。

*5 標準的な讃美歌集では、以下の構成です。

第1節＝原詩の第2節と第3節

第2節＝原詩の第4節と第5節

第3節＝原詩の第14節と第16節

なお、全4節版への訳詞については諸説有りますが、以下の構成です。

<https://gccsatx.com/hymns/this-is-my-fathers-world/>

第1節＝原詩の第2節と第3節

第2節＝原詩の第4節と第5節

第3節＝原詩の第10節(の1-3行)と第16節

第4節＝原詩の第14節と第15節

この後、出版された讃美歌集によっては、表現・言葉遣いの現代化等の編集が行われています。讃美歌 21 の 361 番もその一つです。

以上